

# 授業研究

問題の提起・体育科

## 子どもたちがルールづくりに関わる体育科授業

広島大学附属小学校 坂田 行平

### はじめに

本校では、令和7年度の研究において、子どもたちが主体的に学習に向き合い続ける態度を、「社会事象や教育実践の中で子ども自身が主体となって学びを深めていく過程において、ゴール（終点・完了）だけを指すのではなく、あらゆる実践が達成したあとにおいても、よりよい自分・よりよいものを目指して考え続ける・向き合い続ける態度」と示した。この姿は、これまでに子どもたちが学んだものや自分自身の経験をリソースとして活用し、統合的に思考を働かせることである。

体育においては、現在の運動文化のあり方を発展的に継承しつつ、よりよい運動文化に変革しようとする態度であると考ええる。自ら進んで運動に取り組み、運動を楽しもうとする子どもの姿をめざしたいと考える。

丸山（2015）は、体育における実践的課題を3つの領域に整理し、これらを「複合的に統一された不可分な関係」としてとらえ、図1のように示した。体育は、主に技術的内容を中心とする「ともにうまくなる」過程と、組織的内容を中心とする「ともに楽しみ競い合う」過程で構成されるが、学習段階が進むにつれて「ともに意味を問い直す」過程として、社会的・歴史的・

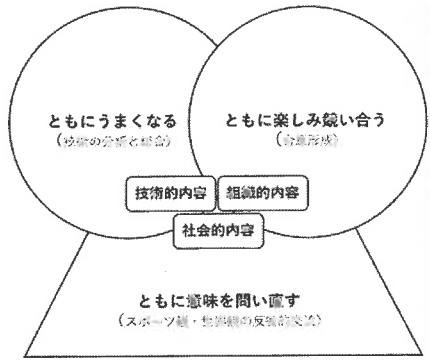


図1 体育における内容の領域構成

文化的認識などの社会的内容の獲得が目指される。これについて、丸山（2015）は次のように説明している。

「体育の授業では『ともにうまくなる』（第1領域）に関わる技術的内容

図的に組織して第1領域と第2領域の課題追究に組み込んでいく必要がある。『ともに意味を問い直す』という価値形成に深く関わる課題は、第1・第2領域の実践課題を支え方向づける実践課題として位置づけられよう。同時に、教科内容との関係で言えば、『ともに意味を問い直す』実践課題は、あらゆる発達段階において3つの内容領域（技術的内容、組織的内容、社会的内容）のすべてに組み込まれながら子どもの価値形成や確信、習慣、行動様式等の発達に関与することになる。」

体育の授業場面では、技術の習得やルールの合意形成過程で、互いの経験・価値観の相違や子ども同士の意見の食い違いが見られるが、丸山（2015）は、これらの食い違いを「ともに意味を問い直す」過程として意味づけることの必要性を指摘している。

守能（2007）はスポーツのルールについて「何が面白くて何が面白くないかについての、まさに主観的な判断を中身とする合意的な宣言」と述べ、「そのルールの宣言内容は当然、彼らの手で変えられてよい」と示している。競争のルールを考えるために、子どもたちが競争に求める面白さの中身やそう思考するにいたる価値意識について問うような実践が求められる。

と『ともに楽しみ競い合う』（第2領域）に関わる組織的内容（例えば、ルールづくり、組織的な企画・管理・運営）の学びが、技術の分析―総合と子ども同士の合意形成を主軸とする異質協同のグループ学習活動として展開される。こうした学習プロセスでは、子どもたちも教師も授業の中で生起する活動や事象の意味を常に問い直しているはずである。言い換えれば、主として第1領域と第2領域の課題追究をする学習活動の中で、『ともに意味を問い直す』という価値形成に関わる実践課題が浮き彫りになってくる。教師はこの課題を的確に捉え、意